



事業主、家族等との連携による職業リハビリテーション

技法に関する総合的研究

(第2分冊 関係機関等の連携による支援編)

(調査研究報告書 75) サマリー

2007年3月

独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構

障害者職業総合センター

NATIONAL INSTITUTE OF VOCATIONAL REHABILITATION

執筆担当（執筆担当順）

小泉哲雄	（障害者職業総合センター障害者支援部門 統括研究員）
岡本（戸田）ルナ	（障害者職業総合センター障害者支援部門 研究員）
勿田文記	（障害者職業総合センター障害者支援部門 研究員）
木村彰孝	（山口県立防府養護学校 教諭）
泉忠彦	（社会福祉法人神奈川県総合リハビリテーション事業団 神奈川県リハビリテーション病院職能科科长）
小池磨美	（障害者職業総合センター障害者支援部門 研究員）
仲村信一郎	（障害者職業総合センター障害者支援部門 研究員）

調査研究報告書の構成

概要

第1章 家族支援に関する関係者のニーズと課題

第2章 トータルパッケージの活用とホームワーク版の提案

第3章 トータルパッケージの試行を介した関係機関との連携

第4章 トータルパッケージを活用した連携の課題

資料 補遺 家族支援の枠組みと関係機関の取り組みの課題

《 MWS ホームワーク版の概要 》

調査研究の目的と方法

研究全体の構成

本研究では、主として精神障害者、高次脳機能障害者さらには発達障害者等、職業リハビリテーションの充実が強く求められている障害者を念頭におき、

障害者本人の支援に加えて、雇用する側の事業主に対する支援の充実を図ること
支援に当たっては、障害者の態様に応じた関係機関（学校、医療機関、福祉関連施設、職業リハビリテーション機関）及び家族の連携による、円滑かつ一貫した支援を実現すること

連携の核となり、かつ、事業主支援にも活用できるツール及びその活用法の確立
を図り、連携の具体的実効性を確保すること

の3点を調査研究の目的として、所要の実態把握、ニーズ調査、好事例の収集整理、支援技法の試行・検証等を行った。

また、連携の核となるツールとしては、平成11年度～15年度の特別研究「精神障害者等を中心とする職業リハビリテーション技法に関する総合的研究」で開発した、「職場適応促進のためのトータルパッケージ」を活用することとし、その標準化の水準を上げるとともに、新たに家族支援も念頭においたトータルパッケージホームワーク版の開発を行った。

本報告書の位置づけ

本研究の成果を以下の3つにとりまとめた。

調査研究報告書（第1分冊 事業主支援編）

事業主のニーズ調査、経営システム理論に基づくベストプラクティス企業の事例分析、地域障害者職業センターにおける支援の好事例分析等の結果をとりまとめ、これをもとにした支援のあり方、事業所への提案事例の検討結果を報告するもの

調査研究報告書（第2分冊 関係機関等の連携による支援編）

トータルパッケージの活用を通じて行った、教育・医療・福祉等の関係機関との連携のあり方の検討結果、関係機関との連携に関する課題の検討結果の報告とトータルパッケージホームワーク版の概要の紹介、活用の提案を行うもの

「トータルパッケージの活用のために」（マニュアル）

トータルパッケージの理論的背景及び構成、機能、標準化（基準）、の紹介に加え、活用上の留意事項（障害別）などを内容とする研究者・実務者向けマニュアル（先行研究の成果及び本研究の成果（ から必要な部分を選んだもの）に標準化に係るデータ等を加え、体系的に整理したもの）

本報告書は に該当するものであり、他の2本と併せて、研究全体の報告となるものである。

研究期間

平成16年度～平成18年度

調査研究の内容

第1章 家族支援に関する関係者のニーズと課題

本機構の地域障害者職業センター（以下、地域センター）及び広域障害者職業センター（以下、広域センター）を対象とした、「家族支援に関するアンケート」及び6都道府県6機関の障害者関係の家族会等を対象とした、家族支援ニーズに関する半構造的インタビューを行った。

地域センター及び広域センターを対象とした調査結果から、ホームワーク版は支援対象者によっては有効であるとされ、「家族の障害理解を深める」、「家族を本人の支援者として育てる」、「生活リズムを安定させる」等に視点が置かれていることがわかった。

また、家族会等へのヒアリング結果から、ホームワーク版は「生活リズムを安定させる」、「モチベーションを向上させる」、「家族・本人が積極的に職リハに取り組むことができるようになる」等の効果が期待されており、活用可能性が高いとの回答が得られたのと併せ、ホームワーク版を実施する際は、ノウハウの提供とフォローする専門支援者の存在が必要であるとされていた。

これらの調査及びヒアリング結果から、トータルパッケージの教材は、支援ツールとして多様な支援目的のもと、多様な障害を対象として広く活用されていることや、ホームワーク版には「教材」としてのニーズが高いこと等が明らかになった。

第2章 トータルパッケージの活用とホームワーク版の提案

1 第1節 トータルパッケージ及びホームワーク版の概要

トータルパッケージは、支援対象者が作業遂行力、対処行動、補完手段・補完行動を獲得し、個々の力に応じたセルフマネジメントスキルを身に付けることや、また、支援者が個々に必要な指導・支援を総合的に提供することができるよう、開発された技法であり、以下の5種類のツールとグループワークで構成される。

ウィスコンシン・カードソーティングテスト

<Wisconsin Card Sorting Test ; WCST >

遂行機能障害に関する検査を、補完手段等の必要性を推定しながら実施できる。

メモリーノート（幕張版）<Makuhari Memory Note ; M-メモリーノート >

スケジュールや行動の管理、行動記録、情報共有のツールとしてニーズに合わせて使用できる。

ワークサンプル簡易版（幕張版）<Makuhari Work Sample ; MWS >

作業課題（4種類の事務課題、5種類のO A 課題、4種類の実務課題）を体験することより、職業興味や適性、作業遂行への障害の影響等を予測する。

ワークサンプル訓練版（幕張版）<Makuhari Work Sample ; MWS >

難易度別に設定されたそれぞれの作業課題に取り組みながら、作業遂行力の向上を段階的に図る。

幕張ストレス疲労アセスメントシート

<Makuhari Stress Fatigue Assessment Sheet ; MSFAS >

障害状況に関する情報の整理、ストレスや疲労のセルフマネジメントへの支援に活用できる。

グループワーク

情報交換や討議を行う機会を設定し、支援のポイントを整理・確認する。

また、ホームワーク版は、トータルパッケージのMWSと共通のOA課題(5種類)に、新たに家事労働を分析して開発した事務課題(3種類)、実務課題(3種類)を加えたワークサンプルであり、家事労働から職場における労働への段階的発展を指向していることから、関係機関や家族等は、具体的なワークサンプルやツールの活用を通して、労働力としての本人の能力を客観的に把握できる機会を得る。さらに、専門機関からスーパーバイズを受けることで、関係機関や家族自らが職リハの支援者として機能する役割を学習できる。

ホームワーク版は、支援対象者が家族や職リハ専門機関以外の関係機関の支援を受けながら実施するものであるため、わかりやすさを意識しながら各課題を作成し、これと併せて指示書、マニュアル、ビデオ教材も作成した。

また、ホームワーク版をトータルパッケージの他の要素と組み合わせて実施するこ

とにより、セルフマネジメントの習慣化を図ること等に活用可能である。従って、家庭や教育、福祉の現場での職リハ待機者、生活リズムの改善が必要な者、家庭内自立を指向している者等の指導・支援技法として有効と考えられる。

2 第2節 トータルパッケージ並びにホームワーク版の活用事例

- 家族支援を視野に入れた活用事例 -

(1) 教育機関におけるトータルパッケージの活用事例

養護学校高等部における生徒一人ひとりのニーズに応じた適切な指導と支援を行う特別支援教育の一貫として、トータルパッケージ及びホームワーク版の活用を試行した。

対象障害は、知的障害、LD、自閉症等の発達障害、身体障害、脳梗塞後遺症等であり、活用場面は作業学習等の授業、校内実習、進路指導等である。また、ホームワーク版は、寄宿舍や家庭等で活用された。試行の結果、職業準備性の向上とともに、次の職リハサービスへ円滑に移行できる可能性があることが示され、加えて、就労の観点を離れて、生活面に課題を有する者への改善の指導や、比較的障害の重い生徒に対する学習への有効性も示唆するものであった。

さらに、教職員の職リハに対する意識が、トータルパッケージの導入により、具体化していく方向への変化が見られた。

(2) 医療機関におけるトータルパッケージの活用事例

医療機関のリハビリテーション部門において、トータルパッケージのMWSの実施を試行した。

対象障害は高次脳機能障害であり、障害の理解や認識を深める初期段階から開始しているが、時間的な制約から、本来、想定している集中的実施は出来ない等の事情により分散的に実施した。その結果、MWSは障害への理解を進める活動のツールとして活用され、一定の効果が見られた。さらに、MWSは神経心理学的検査では計測できない部分を行動観察できること、難易度が明解であること等から、支援対象者と職員の間関係に依存することなく結果を説明できること等のメリットが認められた。

今後、リハビリテーション部門の評価・訓練の共通尺度として、トータルパッケージのMSWを位置づけることが検討されている。

(3) 福祉機関におけるトータルパッケージの活用事例

精神障害者生活支援センター及び小規模作業所において、トータルパッケージの活用を試行した。

精神障害者生活支援センターにおいては、トータルパッケージ全般の試行が行われた。この結果、支援対象者は各作業を正確かつ安定して行うとともに、個々の疲労・ストレスの程度に応じた休憩を日常的に取得することができるようになった。また、疲労状態を表すサインを、職場と施設が共有することの有効性が注目される。

しかしながら、ボリュームのあるトータルパッケージを、日常的に支援活動の中に組み入れていくには、施設の現場において、相当の工夫が求められることが課題となる。

また、小規模作業所においては、知的障害者をはじめとした発達障害者を主たる対象としており、入所希望者の作業体験実習の過程で MWS を活用した。その結果、対象者にとって、実際の職業に近い作業を体験できる貴重な体験となったことや、各々の障害の特徴が明らかになったこと等が報告された。しかし、「なぜ、MWS を実施するのか」が支援対象者に伝わりにくく、結果の正否にのみとらわれる傾向が見られるとの問題点も指摘された。

(4) 職リハ機関におけるトータルパッケージの活用事例

本機構の地域センター(47所)及び広域センター(3所)に対してアンケート調査を実施したところ、WCST と MSFAS は、職リハ計画策定の際の基礎資料として、M-メモリーノートは、補完手段を検討する際のツールとして、また、MWS は、職業準備支援コースにおける作業体験課題として活用されている状況が確認できた。

障害種別としては、高次脳機能障害や精神障害以外にも、身体障害、知的障害、発達障害、その他の障害に対し、相談や訓練等の様々な場面で、カウンセラーや指導員等によって、幅広く活用されていることがわかった。

第3章 トータルパッケージの試行を介した関係機関との連携

1 第1節 教育機関と職リハ機関との連携モデルと課題

現在、養護学校における進路指導の問題は、「『就職できること』より『定着していること』」に焦点が当たっており、中長期的視点による進路指導の実践により、卒業後も個々の目標実現に必要な課題をクリアしながら、次の段階へスムーズに移行させる体制が、関係機関相互の連携により構築されつつある。

このような動きの中で、ネットワークの構築、教育機関卒業後の支援、本人の意思に基づいた移行支援に関するニーズが強調されるべきであると考えられる。

進路指導に関連するトータルパッケージの導入は、情報共有の機能を持つメモリーノート、本人・家族・関係機関相互が連携して、早期の職リハサービスの有効なツールとなる MWS 及びホームワーク版の活用等を通じて、連携の実効性を高めるものと考えられる。また、労働・福祉・医療・教育の各関係者や保護者等、トータルパッケージに関する関心は高いものとなっており、支援者間の共通理解のためのポイントの一つとしてトータルパッケージの役割が期待される。

2 第2節 医療機関と職リハ機関との連携モデルと課題

医療機関と職リハ機関の連携のもと、医療情報が医療機関から職リハ機関に対して提供されることは、高次脳機能障害者の就労支援に欠かすことができない。医療機関においてトータルパッケージを実施し、そこで収集された情報を医療機関と職リハ機

関が共有しながら支援を展開していくことが重要であると考えられる。また、事業所へ提供する情報としても、課題の内容がイメージされやすいものと思われる。

今後、医療機関におけるトータルパッケージの活用を進めていくためには、評価機能を確保するための活用方法の統一性の実現、情報交換のための書式の整備や情報交換システムの構築等の検討が必要である。

3 第3節 福祉機関と職リハ機関との連携モデルと課題

- (1) 精神障害者を対象とする福祉施設において、職業情報の提供を中心としたガイダンスとトータルパッケージの集中訓練の試行を行った。この結果、利用者の障害認識が深まり、生活障害や認知機能障害等、障害を補完する方法の習得への意識付けが図られた。支援対象者が職業情報や補完方法を用いた作業を体験することで、働き手としてのイメージ形成の変化につながった。併せて、施設スタッフにも障害認識の変化（疾病という概念から、生活障害・機能障害という概念への変化）等が見られ、就労支援に必要な視点を併せ持つことにつながり、福祉領域から就労支援領域への支援対象者のスムーズな移行に有効であることが確認できた。

今後、福祉施設関係者に対して、トータルパッケージの基本的使用方法についての周知と、トータルパッケージの持つ多様な機能を、支援対象者の態様に応じて選択し、活用する方法の検討が必要である。

- (2) 高次脳機能障害福祉施設においてメモリーノートの活用を試行した。導入に先立ち、地域障害者職業センターにおいて、支援対象者に対しWCSTを実施し、補完手段の必要性に関する認識の深化を図った。

試行結果に関する施設スタッフの所見は、以下の4点である。

注意を受けたことの内容がM-ノートに記入されることで、支援対象者と施設スタッフ間のコミュニケーションの齟齬が減った。

施設スタッフがM-ノートを介在して、支援対象者個々の課題に関する共通認識が形成されたことで、一貫した指導が可能になった。

口頭で作業手順を繰り返し指導していたが、M-ノートに作業手順が記入されているため、「該当ページの参照」を指示するだけで、作業行動の開始を無理なく喚起できるようになり、作業指導の効率化が図れた。

家族への伝達は施設スタッフが直接、口頭で行っていたが、M-ノートを通じて確実に家族との連絡事項を伝達・報告することができるようになった。

また、メモリーノートを施設全体として導入したことにより、支援対象者同士が、お互いに声を掛け合うことで活用が自然と促進されている。例えば、外出時には支援対象者全員がM-メモリーノートを持参する習慣ができていることから、M-メモリーノートが、生活上、欠かすことの出来ない補完手段として活用されていることを示している。

このように、個々の支援対象者の自律的行動を促進し、施設運営上も大きな効果

をあげたと認識されており、現在は MWS の導入も検討されるにいたっている。

4 第4章 トータルパッケージを活用した連携の課題

本研究での試行結果、事例分析から、トータルパッケージを介在させた職リハ機関及び関係機関との有機的な連携について検討した。

(1) M-メモリーノートの活用による連携

(下図「M-メモリーノートの活用による連携の模式図」参照)

M-メモリーノートを活用することで得られた情報を関連機関が共有する過程については、支援対象者本人の了解事項となっていることから、複数の機関や支援者が共通の認識に基づいて支援を行うことができるようになる。

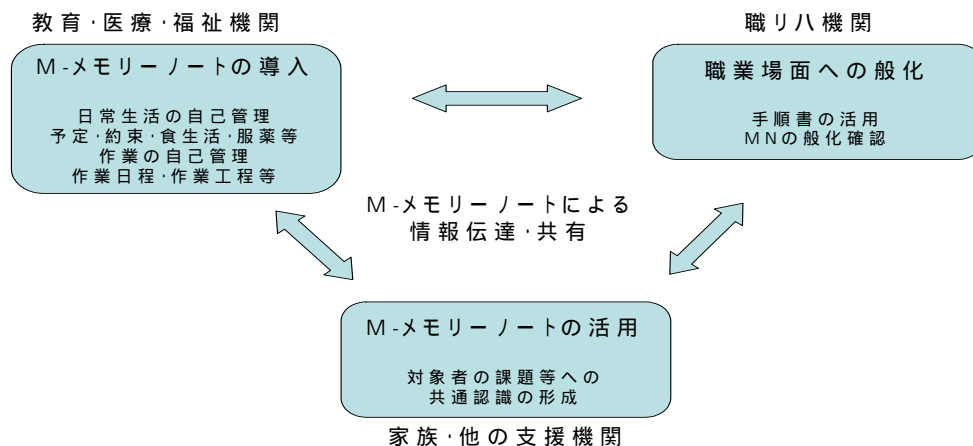
今後、M-メモリーノートを活用した情報共有による機関連携が、既存の職リハ機関にまで広がりを見せるようになれば、より職業生活に近い場面へと M-メモリーノートの活用が般化されることとなる。こうした状況の変化の下では、職場での自律的行動を支えるだけでなく、職場と家庭、様々な支援機関を結ぶツールとして機能させていけるような支援ノウハウが、職リハ機関には期待されるようになるであろう。

「M-メモリーノートの活用による連携の模式図」

(2) ワークサンプル(MWS)の活用による連携

(下図「MWSの活用による連携の模式図」参照)

MWSを導入することにより、いわゆる職業前段階における支援が、教育・福祉・医療の中に取り入れられ、より早期に職業を意識した取り組みが実現可能であることを示している。また、これらの試行では、支援対象者が抱える職業上の課題を具



体的に捉えることにも役立てられている。

様々な機関が MWS を活用し、職業生活を意識した支援を行うことで、支援対象者は継続的かつ段階的に、具体的な目標を持って支援を受けることが可能となる。

一方、職場復帰支援が職リハ機関で行われる際に、関係機関における MWS の活用支

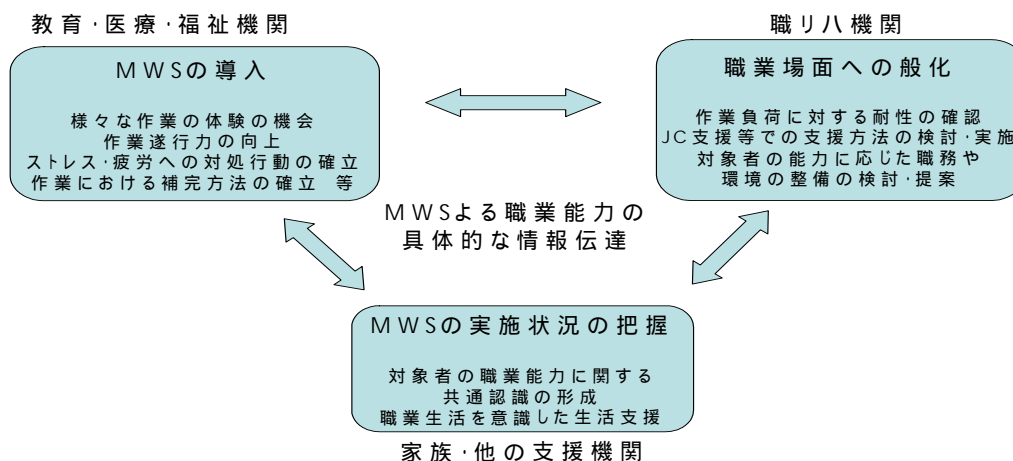
援状況が伝達されれば、支援対象者が新たな作業を学習する場合の、有用な事前情報として、また、ジョブコーチ支援での具体的な支援方法の検討に役立つ。

さらに、MWSの実施状況を家族や他の支援機関に伝達したり、家庭内での生活場面で実施できるホームワーク版を活用することで、支援対象者の職業能力についての共通認識の形成を図ることができ、職業生活を指向しつつ、現状のニーズに応じた生活支援を検討することに役立つと考えられる。

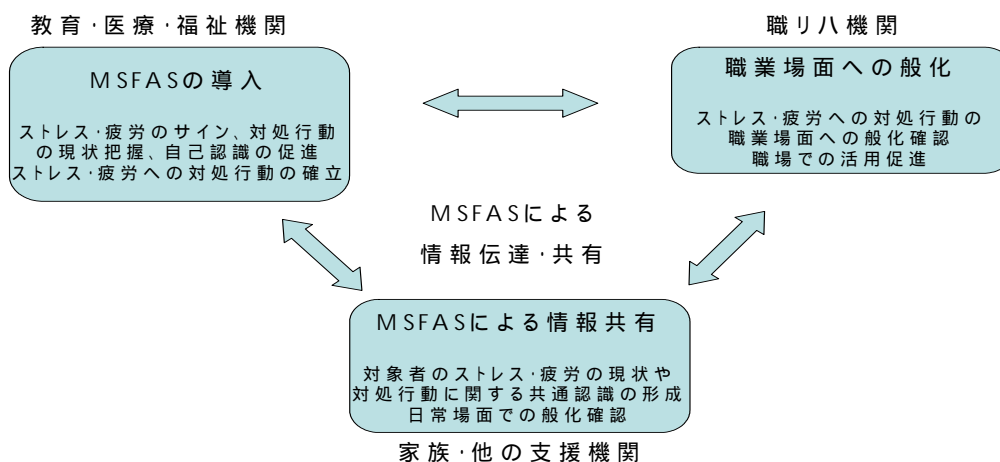
「MWSの活用による連携の模式図」

(3) MSFASの活用による連携(下図「MSFASの活用による連携の模式図」参照)

MSFASは、ストレスや疲労に関連する様々な要因や、ストレス対処行動の現状を整理するための様式群である。MSFASを利用することにより、職業前の支援段階にいる支援対象者に対しても、自身の障害状況の認識や、対処行動の必要性の確認に役立つことが示唆されている。MSFASのデータに基づき、ストレスや疲労に適切に対処し、自己の作業能力を維持できるセルフマネジメントスキルを、実際の職場でも発揮できるよう、職リハ機関が支援することで、支援対象者の職場での自律的



行動を促進すると共に、ナチュラルサポートの確立にも役立つと考えられる。



「MSFAS の活用による連携の模式図」

巻末資料

補遺 家族支援の枠組みと関係機関の取り組みの課題

家族支援を行う場合、支援対象者本人の状況だけではなく、家庭の状況によっても支援方法や支援効果が異なるものと考えられる。

本研究では、個々の家族の構成や機能の多様性に対応した連携のあり方にまで立ち入って検討するに至らなかった。そこで、他の研究分野における家族の構造や機能等に関する研究成果を概観するとともに、家族を支援者としていく際の要件や困難性等に関し、若干の考察を加え、今後の研究の基礎資料とすることとしたものである。

ホームワーク版の概要

本研究において開発し、活用を提案したホームワーク版を個別課題毎に概説したものである。

今後の展望

本研究においては、家族や関係機関との連携についても多くの事例を通じてトータルパッケージを活用した円滑な連携の可能性を検証し、新たに開発・提案したホームワーク版の活用可能性についても肯定的な結果を得ることができた。

しかしながら、これまでの研究成果は、事例的・部分的あるいは理念的なものにとどまっているため、補足的な研究を進め、一般化・体系化・実用化をしていく必要がある。今回、トータルパッケージ・マニュアルの整理・刊行によって一定の実用化には至ったが、不十分な点もあり、今後の研究課題としていきたい。

他方、このような研究をさらに進めていくために、多くの事例の収集・検証が必要であり、そのためには、まず、トータルパッケージや今回提案したホームワーク版が多くの関係機関で取り入れられていくことが必要である。関係機関での関心が高まり、試行・導入が進むことを期待したい。

主要参考文献

障害者職業総合センター（2004）．調査研究報告書 No.57 精神障害者等を中心とする職業リハビリテーション技法に関する総合的研究（最終報告書）

障害者職業総合センター（2004）．調査研究報告書 No.58 高次脳機能障害を有する者の就業のための家族支援のあり方に関する研究

障害者職業総合センター（2004）．調査研究報告書 No.64 精神障害者等を中心とする職業リハビリテーション技法に関する総合的研究（最終報告書）及び（活用編）